

# 名古屋外国語大学海外派遣プログラム成果報告書

2022年 11月 9日

学部・学科名 世界教養学部国際日本学科

担当教員氏名 宮本 真有

1. 区分	中期留学 ・ 語学研修 ・ <b>海外実習</b>
2. プログラム名称	銘傳大学日本語教育実習
3. 渡航先国名	台湾（オンラインにて実施）
4. 派遣期間	2022年 3月 7日（月）～ 2022年 3月 18日（金） 12日間
5. 派遣先教育機関名	銘傳大学
6. 参加学生数	2名
7. 派遣目的	銘傳大学（台湾桃園）応用日本語学科学生を対象として、日本語授業の見学や教壇実習を行い、あわせて異文化体験や銘傳大学生との交流の機会をもつこと。
8. 派遣内容	① 事前指導 : 教壇実習で担当する予定の教授内容につき、授業計画立案、教案作成などを行い、指導を受ける。 ② 教壇実習 : 銘傳大学応用日本語学科の初級と中級授業において、実習生は各自2回の教壇実習を行う。実習に先立って銘傳大学教員による教案指導を受け、実習後に批評・助言を受ける。 ③ 異文化体験 : 銘傳大学の学生や教員との交流を通して台湾の人と文化に触れる。 ④ 実習報告書を作成する。

9. 成果	<p>教壇実習に至るまでの過程で、担当課への理解の深め方、教案作成、学生たちとの関係づくり、現地校の背景情報収集など、日本語教育に携わる者として必要なスキルを身につけた。2度行った教壇実習では、その都度担当教員と振り返りを行うことで、自らの教師としての強みや弱みなどを把握し、今後の改善点を模索しながら、常に学び続ける姿勢を培った。また、現地の学生たちとの Zoom 交流会では、同世代の学習者たちが日本のどのような側面に興味を持っているのかなど、交流を通して得た知識を教案に役立てたり、現地の学生の生活について知ったりことができ、台湾の文化に対する理解も深まった。</p>
10. 備考	

以上

## 日本語教師への第一歩

新型コロナウイルスの影響により、昨年を引き続き今年度の台湾教育実習もオンラインでの実施となった。名古屋外国語大学に入学する大きな決め手となったといっても過言ではないほど、この実習を心待ちにしていた私にとって、この状況下での実習は非常に残念であり、また少しの不安要素を含んでいた。今回の実習では教壇に立ち授業を行うという将来自分の目標としている日本語教師を実際に体験し、教師として大切なこと学び、自分の今の実力を測ることを目的として参加を希望した。そして複雑な心境のもと、約一ヶ月半の台湾実習が始まった。

実習で学んだことは大きく分けて3つある。まず自分の日本語に対する内容理解の甘さである。三年間この大学で日本語教育について、また日本語の文法について専門的に学んできた。自分が望んで学習してきた分野ということもあり教案を作るのにはそれなりの自信はあった。しかし実際に作成にとりかかるとすぐに文型の知識の薄さに気がつくこととなった。中級クラスで教える『〇〇にVれる』『〇〇にNをVれる』といった受身形は特に説明をするのが難しく、自分自身が文法理解をしていないと日本人でも日本語を教えることは安易ではないと改めて考えさせられた。今回はあくまで会話のクラスであり、授業では文法の内容を詳しく教える必要はなかったものの、こういった状況は教師として致命的であった。担当指導教員である川合先生からのフィードバックで一度提出した教案が訂正の真っ赤な文字だらけになってかえってきたときは心が折れそうになり、また、実習生であり教師である自分の未熟さを痛感した。

2つめに学んだことはオンライン授業で必要とされる工夫点である。実習はZOOMを使用するものの、対面授業のように教壇に立ち、現地の学生全体の様子を見ながら行う模擬対面授業のようなものだった。授業の前には接続確認をし、カメラの位置も何度も微調整しながら実習に臨むので、機材トラブルなどのハプニングはさほど問題視していなかった。しかし、授業を行ってみて、学生の表情が見えない、マイクが声を拾わず発声を聞き取ることができない、といったことが本番中に起きた。学生の表情が見えないのは特に後ろの席に座っている場合であり、机間巡視のできないオンライン授業でかなりのもどかしさを感じた。また、マイクによって声が聞こえないときは学習者が正しく発話できているか分からず、「すみません、もう一度言ってください」と言うほかなかった。本来ならスムーズに教室活動を行えただろうといった悔しさが本番になりこみ上げた。最終的には現地の先生方の協力もあり、マイクを二本にしたり画面の明るさを換えたりと手を尽くし時間ロスのない授業ができた。オンライン授業の場合、入念な接続確認と機材等のセッティングがよりよい授業につながることを知った。

3つめに学んだことは学生達の日本語に対する向上心の高さである。教案作りをはじめたとき、私は問いかけに応じる学生の声がなかったらどうしようとよく考えていた。事前学習の際見たビデオで、現地の会話の授業では先生は日本人というものの多少の中国語を使っていた。それに加え慣れ親しんだ担当の先生との信頼度は動画上でも伝わり、非常に良い雰囲気です。授業は進んでいた。ビデオを見た上で私は果たして先生方のような授業が作れるのだろうか、学生は私の授業に積極的に参加してくれるのだろうか、そんな不安が募った。しかし教壇実習は私の予想を大きく裏切るものとなった。事前指導で川合先生が「問いかけてしっかり待てば学生は反応してくれる」と言ったとおりに学生達からの積極性が感じられた。質問に対して答えてくれる人、うなずいたり首を横に振ったりして意思表示をしてくれる人、問題が難しく答えられない人に話しかけて発言のサポートをする人、すべての学生から授業に参加しようという前のめりな感情が伝わってきた。授業を終えた後、自分なりに学生達のポテンシャルの高さを考えてみると実習前に行った交流会を思い出した。

教壇実習の一週間ほど前に実際に現地に行けないことになって ZOOM を使って一時間ほど学生達とお話をする場が設けられた。その交流会は希望者のみで行われたが、初級クラスで3人、中級クラスで6人の学生が集まってくれた。学生達と会話を楽しむ中、私はどちらのクラスにも“なぜ日本語を学んでいるのか”という質問をした。そこで一人一人学生達の発言で共通となったのが“日本が好きだから”という答えだった。アニメが好きで日本語に興味を持った、中学生の頃から日本のテレビ番組を見て独学で学んでいる、日本に行きたいから家でも日本語を何時間と勉強している、など彼らの日本語を含む日本愛は並々ならぬものを感じた。きっとそんな思いを持っているからこそ日本語をもっと上達させようという向上心が生まれるのだろう。彼らの授業を担当させていただいたことを本当に誇りに感じた。

この実習を通して私は日本語教師としての在るべき姿をより明確なものにすることができた。実際に現場に出向くことはできなかったが、得られたものはとても大きかった。そしてそれと同時にやはり自分は絶対に日本語教師になりたいとの思いをもっていたことを再確認できた。今回の台湾教育実習を日本語教師になる第一歩とし、理想とする教師になるべく勉強に励み続けたい。二週間の実習は生涯忘れることはないだろう。

## 台湾実習を終えて

### 【人生初の教案】

今年も去年と同じく、オンライン実習になりました。心の中では残念な気持ちでいっぱいでしたが、コロナの状況ではしょうがないことだと自分を宥めていました。そして、そんな気持ちで事前指導を迎えました。中国語講座、教材分析などの最初の十回は楽しんでいましたが、その後、実際に教案を書いてみると苦悩の連続でした。初稿はまず宮本先生の指導のもとで、初級クラスに相応しい教案を完成させるために何度も書き直して行く中で、段々と正しい日本語が分からなくなってしまったことも何回もありました。知らず知らずのうちに難しい日本語を使ってしまい、フィードバックで気づくことも何回もありました。今、実習を終えてから言えることですが、宮本先生の事前指導がなかったら私は決して教育実習の最後までやり切れる自信がありませんでした。人生初の教案を書くことによって、教師の大変さを実感しました。だから、お忙しい中で十五回も事前指導してくださった宮本先生に感謝の気持ちでいっぱいです。

### 【目標への達成度】

日本語教育という言葉は大学3年間の授業の中で毎日触れていますが、実際に先生の立場で何かをすることは全くありませんでした。だから、何も知らない私が一番最初に決めた目標は実習を終えたら一人で授業ができるようになることでした。結果はもちろんのことで、実習を終えても私は一人前になれる自信はありませんでした。しかし、今回の実習を通して、教師として気をつけなければならない点について具体的に知ることができました。そのことだけでも私自身にとって大きな進歩になったと思います。

### 【実習からの学び】

実習から得たものは多すぎて書き切れませんが、大きく二つに分けます。まず一つ目は教案を素早くより完璧なものに仕上げる方法です。第一回の教壇実習は事前指導も含めてたくさんの準備時間がありましたが、第二回の実習は一週間の準備時間しかありませんでした。今福先生の指導のお陰で何度も教案を書き直していくうちに自分がやりたい理想的な授業を追求していきました。自分が完成した教案を見直すと非常に大きな達成感を得ることができました。二つ目は授業中の臨機応変力の大切さです。オンライン授業は対面に比べて音声の環境が異なるので、学生の発話が聞こえない時、もしくは聞こえにくい時がよくあります。その中で誤用訂正する方法やもう一度発話してもらうタイミングが重要で、教壇実習の中で一番苦勞したことでもあります。

### 【台湾実習の感想】

台湾実習で良かったと思う点は台湾の実習担当の教師が優しく、丁寧に指導してくださることです。台湾ではLINEが使われているので、担当教師とのやり取りも非常に便利で素早く返信することができます。また、台湾の学生たちは非常に協力的な姿勢でした。実習期間が始まる前にまずクラス別で台湾の学生とLINEで交流会を行いました。その時はどのクラスの学生もフレンドリーで交流会は順調に進みました。その後の教壇実習も学生が活気的な雰囲気の中で授業が盛り上がり、良い思い出になりました。

#### 【まとめの感想】

初級クラスの教案の初稿から二回目の教壇実習が終わるまでずっと緊張感と思い悩みに包まれていました。特に二回目の教案を書く時に自分は文法に対する理解が足りないことを知り、ショックを受けました。また、教育実習全体を通して日本語教師の授業方式、授業をする時に注意すべきことを知ることができました。それと同時に自分が教師として教壇に立つ時の不足点を知ることができました。オンライン実習で不便なことがたくさんありましたが、何もわからない私たち実習生を細かく指導して下さった先生方に感謝の気持ちを込めています。本当にありがとうございました。